

令和7年度

全国学力・学習状況調査における山口市の結果概要について

山口市教育委員会

1 調査の概要

(1)目的

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証して、その改善を図る。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2)調査期日 令和7年 4 月 17日(木)

(3)調査対象 小学校第6学年児童
中学校第3学年生徒

(4)調査の内容

I 教科に関する調査(小学校:国語、算数、理科 中学校:国語、数学、理科)

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
 - ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等
- ※ 中学校理科調査及び児童生徒質問紙調査について、児童生徒が活用する ICT 端末を用いたオンライン形式により実施

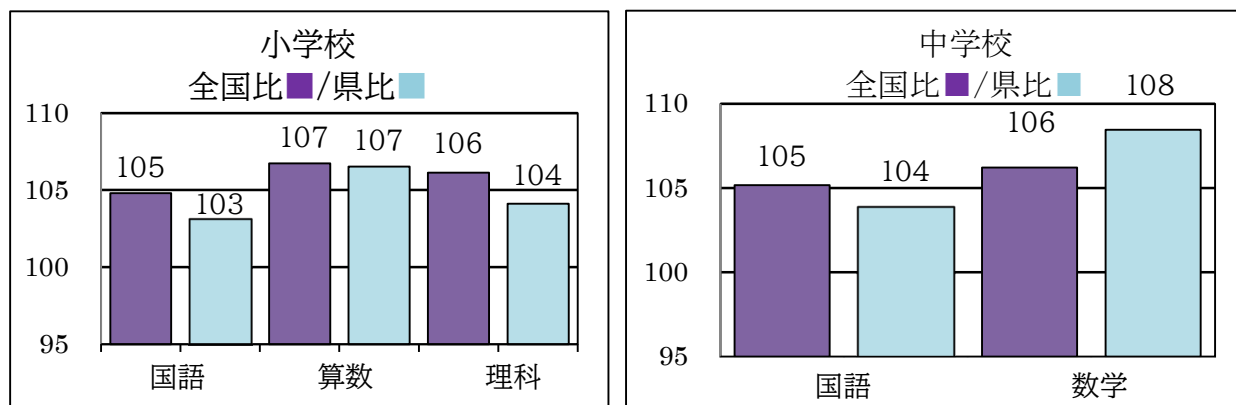
II 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

- A 児童生徒に対する調査(児童生徒質問紙)
- I 学校に対する調査(学校質問紙)

2 教科に関する結果

(1) 山口市と全国・県の各教科平均正答率の比較

全国・県の平均正答率を100として、各教科における本市の結果(指標)をグラフで表しています。



* 小数点以下は非表示

* 中学校理科については、他教科と異なり、各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点「IRTスコア」で表されております。本市の平均IRTスコアは517(全国及び県の平均IRTスコアは503)となっております。

(2) 山口市の現状と今後に向けた方向性

本市の小学校・中学校ともに、全ての教科において全国・県平均正答率を上回る結果となりました。また、学習指導要領に示されている各教科の内容についても、ほぼ全ての項目において全国・県平均正答率を上回りました。

しかし、課題のある問題が見られるほか、教科の平均正答率に差異が見られました。

そこで、本市教育委員会といたしましては、各学校で課題の見られた問題に取り組むための支援をするとともに、昨年度より全面実施している小中一貫教育の中で、各中学校区が一体となった授業改善に向けた研修機会の提供を行ってまいります。

(3) 各教科の調査問題における傾向と学びのポイント

次ページより、以下に掲げる表記を用いて、各教科の調査問題における傾向と学びのポイントについて詳しく説明しています。

各教科の調査問題※ における解答の結果について、本市における傾向をまとめています。

◎…正答率が高かった問題や、経年比較による課題の解決が見られる問題

▼…本市の正答率が50%以下、または全国平均正答率を下回る等、課題の見られる問題

※各教科の傾向の後にある(1)の一などは、問題番号です。

また、解答結果から見られる学びのポイントについて、次の2点でまとめています。

Q …解答結果の考察
 ! …学びのポイント

※調査問題の詳細や全国の調査結果、授業アイデア集などは、国立教育政策研究所の「教育課程研究センター全国学力・学習状況調査」内、「令和7年度調査」の以下のリンクから閲覧することができます。
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html>

◎図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。(2)の二)

◎時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。(3)の一)

▼目的と意図に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考え伝わるように書き表し方を工夫すること。(2)の三)

▼目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけること。(3)の三(1))

<解答結果から見られる学びのポイント>

ー 国語2の三【ちらし】の二重傍線部を、【調べたこと】を基に詳しく書くー

○(条件)
○「ちらし」の部を書き直し、くわしくすること。(一文でなくてもよい)
○「調べたこと」の(本を読んで分かったこと)と(使ってみて分かったこと)のそれぞれから言葉や文を取り上げて書くこと。
○六十文字以上、百字以内にまとめて書くこと。

【調べたこと】

〈本を読んで分かったこと〉

- ブックカバー
 - ・何回か折るだけで、すぐに完成する。
 - ・本の大きさに合わせて包むことができる。
- ペットボトルカバー
 - ・ペットボトルを包んで持ち運ぶことができる。

〈使ってみて分かったこと〉

- ブックカバー
 - ・よごれがつくのを防ぐことができてよかった。
 - ・落としたときに、本がきずつかなかった。
- ペットボトルカバー
 - ・水てきが荷物につかなくてよかった。
 - ・温かい飲み物が冷めにくかった。



三 山田さんは「ちらし」の書き表し方について友達に相談し、「ちらし」の部をくわしく書いたほうがよいと考え、次の「調べたこと」を見直しました。あなたが山田さんなら、どのように書き直しますか。あとの条件に合わせて書きましょう。

【ちらし】

手ぬぐい

手ぬぐいには、いろいろなよさがあります。そのよさは、どのようなものでしょう。

よさ1 もよう

さまざまなもようがあり、好きなもようを選ぶことができます。おくり物としてもぴったりです。

季節を感じるもよう

手ぬぐいには、植物や風景をもとにしたもようがあります。季節に合わせて手ぬぐいを選ぶことができます。

しゅみやすきなものに合わせたもよう

スポーツや音楽などに関係するもようの手ぬぐいもあります。相手のアこにに合わせて、もようを選び、おくることができます。

よさ2 使い方

手などをふくだけではなく、身にかけたり、物を包んだりすることもできます。

身に着ける使い方

あつい日に、水でぬらして首にまくと、すずしく感じます。また、外で作業をするときに頭にかぶると、あせをきゅうしゅうし、両手が空くので仕事がしやすくなります。

物を包む使い方

手ぬぐいは、いろいろな物を包むことができます。

このように、手ぬぐいには、いろいろなよさがあります。みなさんもぜひ使ってみてください。

2 山田さんの手ぬぐいで、伝統工芸品について詳しく書かれました。手ぬぐいのよさについて詳しく書かれています。次の「ちらし」に書いています。これによく読んで、あとの問いに答えましょう。

正答例

何回か折って本を包むと、ブックカバーになり、よごれがつくのを防ぐことができます。また、ペットボトルを包んで持ち運ぶこともでき、水てきが荷物につくのを防ぐことができます。(84字)

3つの条件のうち、文字数や「【ちらし】の部を書き直し、くわしくすること。(一文でなくてもよい。)」という条件を満たすことはできていました。一方で、「【調べたこと】の〈本を読んで分かったこと〉と〈使ってみて分かったこと〉のそれぞれから言葉や文を取り上げて書くこと。」という条件を満たしていない誤答が多く、必要な情報を関連付けながら、自分の考えが伝わるように書き表すことに課題が見られます。

必要な情報を関連付けながら自分の考えが伝わるように書き表すためには、読むことの学習と関連付けることが有効です。今回の設問のような調べたことをもとに書く場面では、説明的な文章を読み、筆者の考えが伝わってきた理由を探るようにします。それから、筆者の考えを支える根拠がどのように示されているのかについて読み取り、筆者の書きぶりのよさを自分の文章に生かしていくことが大切です。また、書いたものを友達と読み合い、自分の伝えたいことが相手に伝えられる文章になっているかどうかを吟味しながら書くことの経験を積んでいくことが大切です。

◎示された資料から、必要な情報を選び、数量の関係を式にし、計算すること。(①の(4))

◎小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて、記述すること。(③の(1))

▼目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述すること。(①の(2))

▼分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述すること。(③の(2))

<解答結果から見られる学びのポイント>

－算数③の(2) $3/4 + 2/3$ について、共通する単位分数と、 $3/4$ と $2/3$ が、

共通する単位分数の幾つ分になるかを書く－

3

(2) ひろとさんたちは、分数のたし算についても、小数で考えたようにふり返っています。

まず、みおりさんは、 $\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ についてまとめています。



$\frac{2}{5}$ は $\frac{1}{5}$ の2個分、 $\frac{1}{5}$ は $\frac{1}{5}$ の1個分です。

$\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ の計算は、 $\frac{1}{5}$ をもとにすると、2 + 1を使って考えることができます。

$\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ は、もとにする数を $\frac{1}{5}$ にすると、整数のたし算を使って計算することができます。

次に、ひろとさんは、 $\frac{3}{4} + \frac{2}{3}$ について考えています。



$\frac{3}{4}$ は $\frac{1}{4}$ の3個分、 $\frac{2}{3}$ は $\frac{1}{3}$ の2個分です。

もとにする数が $\frac{1}{4}$ と $\frac{1}{3}$ でちがうので、同じ数にしたいです。

$\frac{3}{4} + \frac{2}{3}$ についても、もとにする数を同じ数にして考えることができます。

もとにする数を同じ数にすると、その数は何になりますか。その数を書きましょう。また、 $\frac{3}{4}$ はその数の何個分、 $\frac{2}{3}$ はその数の何個分ですか。数や言葉を使って書きましょう。

正答例

$3/4$ と $2/3$ のもとにする
数を同じ数にすると、
その数は $1/12$ になります。
 $3/4$ は $1/12$ の9個分、
 $2/3$ は $1/12$ の8個分です。



$3/4$ と $2/3$ がそれぞれ共通する単位分数の幾つ分かについて、「幾つ分か」については、多くの児童が理解できていました。一方で、「共通する単位分数が $1/12$ であること」については、課題が見られました。また、通分について書いている誤答も多くありました。

なお、本設問については、「無回答率」が高く、題意を適切に読み取り、複数の条件を踏まえ、数や言葉で記述することへの課題も見られました。



異分母の分数の加法・減法の学習では、単に計算ができるようになることだけでなく、分数の意味や表し方に着目し、計算の方法を自ら考えることが大切です。

本設問は加法に関する内容ですが、「小数でできることは、分数でもできるのではないか」という発想から、数の範囲を広げていく考え方が重要になります。

実際の授業の場面では、ビーカー図などを用いて数量関係を視覚的に捉えやすくし、問題解決の糸口を見いだすことができるようにすることが大切です。また、これまでに数の範囲を拡張してきた過程を振り返らせ、学びが連続してつながっていることを実感できるような働きかけを行うことが有効です。

◎ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いていること。(3の(1))

◎温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解していること。(4の(2)(3))

▼身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いていること。(2の(1))

▼レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現することができること。(3の(4))

<解答結果から見られる学びのポイント>

ー理科3の(4) レタスの種子の発芽の結果から、てるみさんの気づきを基に、見いだした問題について書くー

たかひろさんたちは、レタスの種子を発芽させようとしています。



レタスの種子を発芽させようと思って、水、空気、温度の条件を下のようにしたのに、1つも発芽しなかったよ。

たかひろさんが行った実験



しめらせた
だっし綿

《条件》

- ・水あり
- ・空気あり（種子が空気にふれている）
- ・温度（室温）
- ・日光なし（箱をかぶせている）
- ・肥料なし

正答例

レタスの種子が発芽するために、日光は必要なのだろうか。

水、空気、温度のほかにも、レタスの種子が発芽するために、必要な条件があるのかもしれない。レタスの種子が発芽するために必要な条件を、上の《条件》の中から1つ選んで調べてみたい。



(4) てるみさんは、調べてみたいことをもとに、新たな【問題】を見つけました。てるみさんは、どのような【問題】を見つけたと考えられますか。その【問題】を1つ書きましょう。



水、空気があり、室温の条件で、レタスの種子が発芽しなかったことや、てるみさんの「水、空気、温度のほかにも、レタスの種子が発芽するために必要な条件があるかもしれない」という発言から、日光または肥料が発芽するために必要な条件であることに気付くことはできていました。一方で、その条件が発芽に必要なものか確かめる実験とするために、どのような問題文にすればよいか記述することに課題が見られました。



児童が自然現象から問題を見いだすためには、与えられた実験を行うのではなく、児童の「なぜ?」「どうして?」という気づきや疑問を大切に、児童が問題を見いだす状況をつくる必要があります。授業では、問題づくりの活動を取り入れ、観察・実験により解決できる問いとして表現させることが考えられます。児童の疑問に対して、「どうやったら解決できそうですか。」と問うことで意見を出させ、児童から出てきた意見の言葉を正したり、補ったりしながら問題をつくっていくことが大切です。問題を見いだす活動は、自ら疑問を発見し、探究していく上で大切な活動であり、科学的な思考力を育むことにつながります。

- ◎相手の反応を踏まえながら、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫すること。(②の二)
- ◎文章全体の部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方を捉えること。(③の二)
- ▼自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くこと。(①の四)
- ▼文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えること。(③の四)

＜解答結果から見られる学びのポイント＞

- － 国語③の四「一 榎木の実」に書かれている場面が、「二 釣の話」には書かれていないことによる効果について、自分の考えとそうように考えた理由を書く－

[illegible]

※ 左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい

四
て、則ちまたの部分には、兄弟が目的を達成できなかった場面との間に続く感傷が書かれています。あとに続く感傷は、「二 柳木の穴」にはありますが、「二 釣魚の話」にはありません。このような疑問になっていることは、「二人の兄弟」という物語にわたるような、どのような因果があるかと考えずか、あなたの心でこの理由を具体的に書きなさい。理由を書いたら、物語の内容を取り上げ、つけて書きなさい。

なお、読み近けて文章を直したいときは、線を引いたところ行間にも書き加えたりしてもかまいません。

(島崎藤村『二人の兄弟』による)

正答例

読者に物語の続きを想像させる効果がある。なぜなら、「一 榎木の実」では、お爺さんの教えによって、二人は好い実を拾うことができたが、「二 釣の話」では、魚は釣れず、お爺さんに失敗の原因を指摘されただけで話が終わっている。その後、二人が目的を達成できたのかどうかは気になるからだ。

問題文の趣旨を読み取り、書かれていないことによってどのような効果があるかについては多くの生徒が理解できていました。一方で、文章の効果とその理由を書く際に、物語の内容を取り上げてはいるものの、本設問で着目している展開を踏まえて書くことができていないなど、根拠を明確にして自分の考えを伝えることに課題が見られました。

根拠を明確にして自分の考えを伝える力を身に付けるためには、事実と考えを区別し、考えまでの道筋を整理することが重要です。そこで、日々の授業の場面において、「どこからそう考えられるか？」と考える根拠を探っていくとともに、同じ考えでも根拠が異なったり、異なった考えでも根拠が同じだったりする面白さを味わうことができるようにしていきます。また、根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりして自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫して書く経験を積み重ねていくことが大切です。

- ◎必ず起こる事柄の確率について理解していること。(7の(1))
- ◎事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ること。(8の(1))
- ▼素数の意味を理解していること。(1)
- ▼ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明すること。(9の(3))

<解答結果から見られる学びのポイント>

－数学1 1から9までの数の中から素数をすべて選ぶ－

- 1 下の1から9までの数の中から素数をすべて選び、選んだ数のマーク欄を黒く塗りつぶしなさい。

1 2 3 4 5 6 7 8 9

正答例

2、3、5、7 と解答しているもの。



2、3、5、7に着目するとよいことについては理解できていました。一方で、1が素数ではないという理解については課題が見られました。なお、本設問における無回答率は非常に低く、多くの生徒が素数に対して誤った理解をしていることがうかがえます。



素数は現行の学習指導要領より小学校5年生から中学校1年生の内容に移行しています。それまでは約数の学習の中で触れられていましたが、現在は数の集合における包含関係や素因数分解の学習で取り扱われています。

教科書には、「1とその数のほかに約数がない自然数を素数といいます。ただし、1は素数には含めません。」と定義されています。しかし、「約数を必ず2つもつ自然数」、「偶数のうち2が唯一の素数」、「すべての自然数は素因数の積に分解できる」など、別の見方ができることや、「3の倍数ではないか」、「5の倍数ではないか」、「7の倍数ではないか」と小さな素数から振るいにかけて大きな素数を見つけていく方法も丁寧に指導する必要があります。このように、数量の性質を見だし統合的・発展的に考察することは、数の概念を拡張していく上で非常に重要だからです。

加えて、約分をするときに1でわることや、素因数分解をするときに1を用いた積に表すことの意味を考えることで、1が素数に含まれないことの意味を数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりすることで、事象を簡潔・明瞭・的確に表現する数学的な表現のよさを実感することのできる学習を積み重ねていくことも大切です。

- ◎科学的な探究を通してまとめたものを他者が発表する学習場面において、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現すること。(①の(6))
- ◎身近な電化製品の電気回路について探究する学習場面において、回路に抵抗がついている理由を問うことで、抵抗に関する知識が概念として身に付いていること。(③の(2))
- ▼水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いていること。(①の(4))
- ▼大地の変化について、時間的・空間的な見方を働かせて、土地の様子とボーリング調査の結果を関連付けて、地層の広がりを検討して表現すること。(⑧の(2))

<解答結果から見られる学びのポイント>

ー理科⑧の(2) Aさんの考えを肯定するためにはボーリング地点③の結果がどのようになればよいかを判断し、青色の地層を移動させ、ボーリング地点③の結果をモデルで示すー

自分の足元にある地層を調べることで、自分の地域についていろいろなことが分かるですね。

地層のボーリング調査のモデルから、分かることを考えましょう。

図1は、Aさんの住んでいる地域について、等間隔にボーリング調査をした4つの地点です。現在、この地域は標高差がなく、平らな地域です。かつては地層が西から東に下がるように傾いていた地域でした。

図2はボーリング地点①、②、④の結果です。
この結果から、青色の地層は、
『・青色は地表面の下に存在する
・同じ厚さである
・ボーリング地点②と④の間に断層が一つある』
と考えました。

Aさんの下線部の考えが正しいなら、ボーリング地点③の結果が予想できますね。

ボーリング地点③の結果は、どうになっているのかな。

(2)
下線部の考えが正しいと言うためには、ボーリング地点③のボーリングの結果がどのようになればよいか。
青色を必要な数だけ適切な位置に移動させ、最も適切なボーリング地点③の結果を示しなさい。

正答例

【ボーリング調査の結果】

ボーリング地点① ボーリング地点② ボーリング地点④

図2 ボーリング調査の結果

青色は、同じ種類の地層を示しています。

ボーリング地点③

図1 Aさんの住んでいる地域

図2 ボーリング調査の結果

各地点で地層が同じ厚さになっていることについては理解することができていました。一方で、「かつて地層が西から東に下がるように傾いていた地域でした」という状況をイメージすることができず、地層の重なり方の規則性に気付くことについては課題が見られました。

生徒が地層の様子やその構成物などから地層のでき方を考察するためには、地層は下の方が古い層であるという知識のみならず、ボーリング調査の結果をもとにして地層の広がりを想像することが必要となります。

そこで、授業では、地域の地形や露頭の観察を行ったり、寒天とストロー等を用いたボーリング調査のモデル実験や博物館の標本などを活用したりして、各地点の地層の構成物の違いや地層の重なり方の規則性などに気付く、地層の広がりなどについての問題を見だし、探究することが大切です。

このように、自然の事物・現象に関わり、それらの中に問題を見だし、見通しをもって観察、実験などを行い、その結果を分析して解釈し表現するなど、科学的に探究することは、科学的な思考力、判断力、表現力等を育成することにつながります。

3 生活習慣や学習環境等の結果

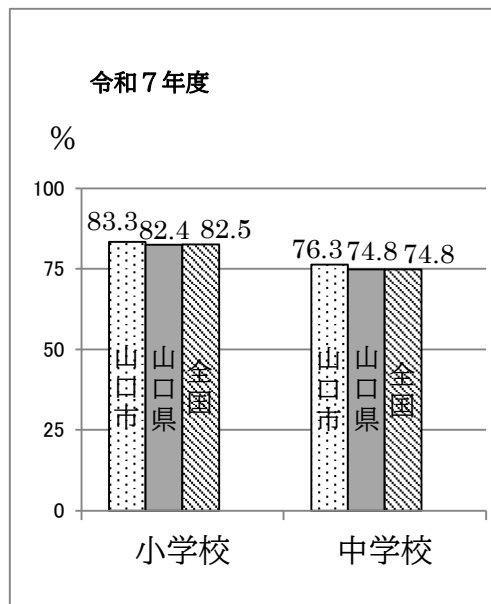
◎…望ましい状況 ▼…課題の見られる状況

◎学ぶことの意味について

「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思いませんか」という問いに、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答している児童・生徒の割合は、小・中学校ともに全国・県平均を上回っています。

自ら問いをもち、他者と考えを共有しながら学びを進める主体的・対話的な学びの充実や地域と連携した体験活動・探究的な学習の充実を通して、児童・生徒が「学びの意味」や「社会とのつながり」を実感し、学びを次の学習や実生活に生かす意識が高まっていると捉えています。

教育委員会では、振り返りの場面で自己の変容や学ぶことのよさや意義を見つめることができる時間を設定し、さらに多くの児童・生徒が、学んだことを次の学習や実生活に生かしていると実感することができるように努めてまいります。

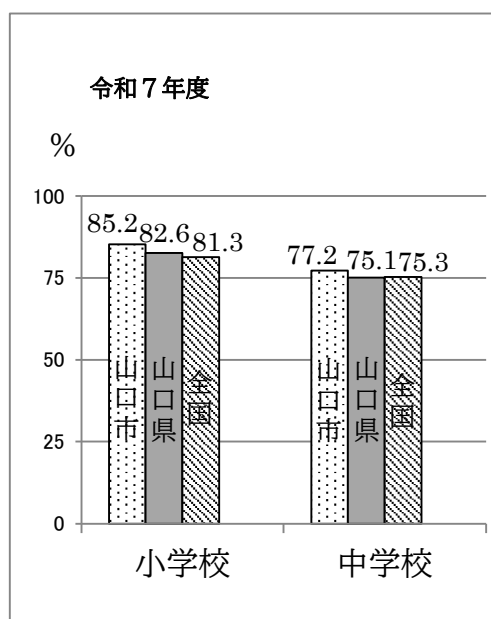


◎地域への貢献について

「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いませんか」という問いに、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答している児童・生徒の割合は、小・中学校ともに全国・県平均を上回っています。

子どもたちが、授業や学校行事等で地域の方と多く関わったり、熟議において地域の課題解決に向けて、話し合いに主体的に参画し、協議したことを大人と一緒に具現化させたりすることで、地域の一員であることの自覚や地域に貢献したいという思いを高めることにつながっていると考えられます。

教育委員会では、各学校において学校・地域連携カリキュラムを見直し、地域と連携・協働した特色ある教育活動をさらに推進することで、引き続き、ふるさとに愛着をもち、地域や社会に貢献したいという思いの醸成を図ってまいります。

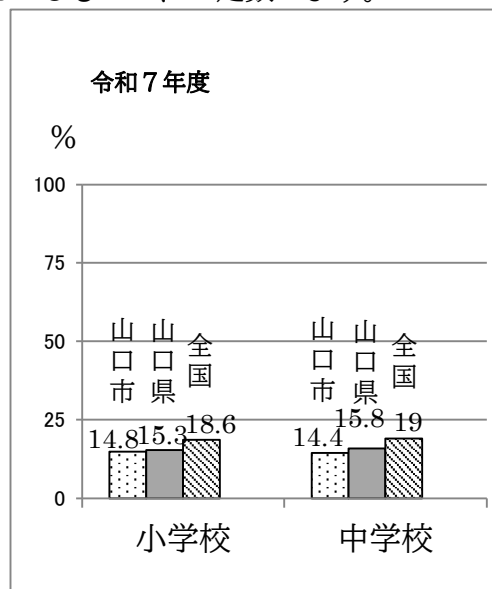


▼授業時間以外の平日の勉強時間について

「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」という質問に、「30分より少ない」「全くしない」と回答した児童・生徒の割合は全国・県平均ともに下回っているものの、一定数います。

同調査の別設問「自分と違う意見について考えるのは楽しいですか」という問いや前記設問の学ぶことの意味については、小・中学校ともに全国・県平均を上回っていることから、学校での学習と家庭での学習が切り離されている点に課題があると捉えております。

教育委員会では、各学校において家庭学習と授業の内容を関連付けることや、1人1台端末や連絡帳、保護者会等を有効に活用し、効果的な学習方法や個に応じた具体的な学習課題を提示することによって、子どもたちの学習意欲を引き出し、自発的な家庭学習につながるよう支援を行ってまいります。

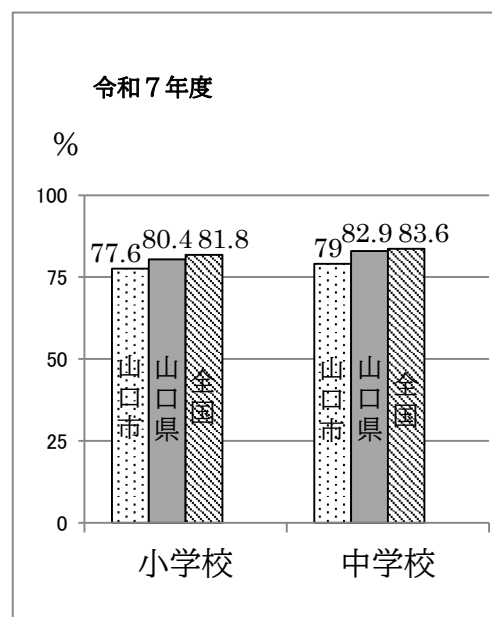


▼PC・タブレットなどのICT機器で文章を作成することについて

「あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器で文章を作成する（文字、コメントを書くなど）ことができると思いますか」との問いに対し、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、全国・県平均ともに下回る結果となっています。

授業での1人1台端末の活用に加え、令和6年9月にAIドリルを導入し、ICT機器を活用する機会は充実していますが、ICT機器で日常的に文章を作成する機会については十分でないため、PC・タブレットなどのICT機器で文章を作成することについて不安を抱えている児童・生徒が一定数いると認識しています。

教育委員会では、引き続き、各学校における授業時の自分の考えや互いの意見を共有する場面においてICT機器を積極的に活用するとともに、振り返り等の場面において、自分の考えをまとめる機会を日常的に取り入れることで、子どもたちが今以上に自信をもってICT機器で文章を作成できるよう、さらなる魅力ある授業づくりを進めてまいります。



4 各学校における特色ある取組事例

【わくわくする授業づくり】

- A小学校では、学力に係る課題について管理職をはじめとした複数名の教員で共有し、課題解決に向けて、共通の視点をもって、算数の授業を行いました。具体的には、ある学級で単元の1時間目となる授業を公開し、授業後に、授業を参観した複数名の教員で気付きを共有した後に次の学級が単元の2時間目を行うという過程を3学級分繰り返しました。このような取組により、課題であった思考力を要する問題への取組が向上したことに加え、教員が放課後に授業について話をする姿が増え、組織的な取組につながるなど、効果を上げています。

【安心・安全な居場所づくり】

- B小学校では、子どもが主体となり、危機意識を高め、安全な行動につなげていくことを目的として、地域の方々と一緒に校区内の「安全マップ」を作製しました。その際、子どもたちが登下校中に危険だと感じたエピソードを地域の方々に紹介したり、地域の方々から、車の運転席から死角となる場所や悪天候時の危険箇所等について教えていただいたりするなど、防犯をはじめ、交通安全や防災の視点からも話し合いが行われ、地域全体の課題として共有するなど、地域と連携した安全教育に取り組んでいます。

【小中一貫教育】

- C中学校とD中学校では、昨年度まで小学校に勤めていた教員が異動により、今年度からそれぞれ中学校に勤めて授業を行っております。このことにより、両中学校では、子どもの様子を的確に見取り、丁寧に対応する小学校教員の強みを生かした授業が展開されてされています。今後、該当の教員が小学校の現場で勤務する際には、中学校教員の強みである組織的な対応力を様々な場面で生かしていくことが期待されています。
- E中学校区では、中学校区で「コミュニケーション力」の育成に力を入れており、研修主題もそれに準じて設定しています。校区内での授業研究会には、学校運営協議会委員など、地域の方々も参加され、授業後の研究協議では、部会ごとに分かれ、「コミュニケーション力」を視点に、子どもの姿から授業について振り返っています。さらに、各学校では、フリートークを行っている他、授業の振り返りの際には、「コミュニケーション力」を視点とした振り返りを行ったり、学校運営協議会で熟議を行ったりすることで、子どもたち自身も「コミュニケーション力」の向上に努めているようになっていきます。

【幼保小連携】

- F幼稚園とG小学校では、管理職がリーダーシップをとり、互いの保育や授業の様子を見合うとともに、研修会に参加し合う仕組みを作りました。その中で、読書習慣がない子が多いというG小学校の課題を共有し、その解決に向けて、F幼稚園の園児のためにG小学校の児童が読み聞かせを行っています。このような学校の課題に対して、幼稚園と小学校が一体となった取組をとおして築かれた、教職員や子どもたちのつながりを生かして、カリキュラムの作成に取り組み、子どもの学びのつながりを大切にしたい教育活動を展開しているところです。

【地域連携】

- H小学校では、5・6年生が中心となって地域のよさ・魅力を伝えるためのオリジナルソングづくりに取り組み、子ども熟議の場で、地域のよさ・魅力を「ひと・もの・こと」を視点にグループごとに分かれて話し合い、オリジナルソングづくりに生かしていききました。出来上がったオリジナルソングは、卒業式の日披露し、学校の木の下で地域の方々と一緒に歌うなど、地域全体での取組となりました。また、他の学年においても、例えば3年生による「地域の自慢マップ」の取組など、特色あるふるさと学習が展開されています。様々な地域の自慢の場所を取材し、紹介する所のそれぞれの関係者の方に何度も紹介文をチェックしていただく中で、子どもたちは地域のよさを再発見するとともに、地域への愛着を深めているところです。